

宮沢賢治 「原体剣舞連」論

大正十三年四月（賢治二十八歳の時）、詩集『春と修羅』を自費出版した。賢治は、これを詩集とはよばず、「心象スケッチ」と傍題した。この詩集に収められた作品は、大正十一、二年の二年間に書かれたもので、その頃賢治は岩手県稗貫郡立稗貫農学校で教師をしていた。『春と修羅』自費出版の後、作成された詩集原稿を『春と修羅』第二集と賢治自身が名づけていることから、出版されたこの詩集をさかのぼって第一集とよぶ。

賢治は、『春と修羅』の詩集原稿を清書した後、印刷所へと渡したが、その渡した後もさまざまな修正や追加を行っているのである。詩「原体剣舞連」においても、冒頭十二行分が二十四行に修正され、原稿の差し替えがなされたうえ、校正の段階においてもさらなる手直しが施され、いったん活字となつてからもなお筆はいれられているといった、賢治の念の入れようが見られる。

賢治がそもそも剣舞を見たのは、地質調査のため江刺郡に赴いた、大正六年八月のことである。友人である保阪嘉内宛の葉書に

濱田有紀子

は剣舞の様子を詠んだ短歌四首が記されており、『歌稿A』には「原体剣舞連」と題して短歌二首が収められている。また文芸同人誌『アザリア三輯』（大正六年十月十七日発行）においては原体剣舞連に関する短歌三首が発表されている。詩「原体剣舞連」の創作日付は、『一九二一、八、三一』となっており、保阪宛で記された短歌との間には五年のへだたりがある。短歌の方を、心象スケッチの方法で描きとつたものであるとするならば、この詩「原体剣舞連」は、短歌の題材を素地として、まさに詩を書くような意識で描かれたものなのだとと言えるのではないか。

*

「原体剣舞連」と題して剣舞の様子を歌った『歌稿A』の短歌二首と、『アザリア三輯』で発表された「原体剣舞連」と題した短歌三首とを挙げ、それら短歌の内容について論じたうえで、そ

の短歌にさらに何が付け加えられ、詩「原体剣舞連」は成立したのかについて考察をすすめる。

『歌稿A』「原体剣舞連」

604 さまよへるたそがれ鳥に似たらずや青仮面つけて踊る若者
605 若者の青仮面の下につくといきふかみ行く夜をいでし弦月

『アザリア三輯』「原体剣舞連」

112 やるせなきたそがれ鳥に似たらずや青仮面つけし踊り手の歌。

113 若者の青仮面の下につくといき深み行く夜を出でし弦月。
114 青仮面の若者よあゝすなほにも何を求めてなれは踊るや。

傍線—濱田

剣舞とは、『宮澤賢治語彙辞典』によると、岩手県に広く分布する郷土芸能で、笛・太鼓・鐘等、八〜十数名の踊り子で組を作り、お盆に各家の仏に回向供養をして回り、かつては町へも門付に繰り出した。また、賢治が江刺郡土性調査で出会った原体剣舞とは、少年によって踊られる羽根子剣舞である。また地域によっては鬼の面をかぶる鬼剣舞等、いろいろな種類があるのだという。先に挙げた短歌では、いずれも少年ではなく若者が剣舞の舞手となっており、なおかつ鬼の面をかぶる鬼剣舞であるかのような

描かれ方がなされているのである。この短歌で描かれている舞手は、事実上の少年による羽根子剣舞とは明らかかな相違が見られる。

『歌稿A』604の短歌〈さまよへるたそがれ鳥に似たらずや青仮面つけて踊る若者〉では、鶏の黒い尾を飾った頭巾をかぶり、たそがれ空にさまよえる鳥の姿に似ているではないか、この青い仮面をつけて踊る若者たちはと賢治は言う。この〈さまよへる〉姿とは、舞手たちを見た賢治の印象なのであり、また『アザリア三輯』の112では、〈踊り手の歌〉に〈やるせなき〉思いをも抱いているのである。そうして、114の〈青仮面の若者よあゝすなほにも何を求めてなれは踊るや〉と、賢治は舞手に問いかける。ここで重要なのは、賢治の心象を通して描かれた短歌は、舞手が少年ではなく若者であること、またその姿をさまよえるもの、やるせなものとして感じ、何を求めて踊るのかと賢治は問う。この剣舞から受けた賢治の印象とは何を物語るのか。剣舞に何を見たのか。詩「原体剣舞連」の分析を行いながら、これについての考えを深めてゆく。

原体剣舞連

(mental sketch modified)

dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah

こんや異装のげん月のした

鶏の黒尾を頭巾にかざり

片刃の太刀をひらめかず
原体村の舞手たちよ

鴉いろのはるの樹液を

アルペン農の辛酸に投げ

生しののめの草いろの火を

高原の風とひかりにさゝげ

菩提樹皮と繩とをまとふ

気圏の戦士わが朋たちよ

宮 若やかに波だつむねを

宮 ふくよかにかゞやく頬を

傍線―濱田

詩集『春と修羅』は、大正十三年（一九二四）四月二十日、関根書店から刊行されたが、賢治はその手元にある初版本の数冊に加筆・削除などの手入れを施しており、その一つに宮沢家所蔵本と呼ばれるものがある。本文の下記にある「宮」とは、その宮沢家所蔵本をさす。

佐藤通雅氏は、この詩「原体剣舞連」を解析して次のように述べる。^{(*)4}「こんや異装のげん月のした」以下17行までは、まず原体村の踊り手たちが描かれる。詩集刊行後、さらに6行目を「若やかに波だつむねを」、8行目を「ふくよかにかゞやく頬を」と修正したのは、踊り手である若者の姿を強調したかったからには、かならない。とあり、宮沢家所蔵本における自筆手入れには、氏が言われるように6行目と8行目に修正が施されており、短歌に続いてこの詩においてもまた、賢治は舞手を見立てようと

するのである。また佐藤氏は、詩の10行目にある「気圏の戦士わが朋たちよ」について、「装束を描き終わり、踊りの準備がととのったところで、「気圏の戦士わが朋たちよ」と呼びかける。それはすなわち、若者たちへの連帯のあいさつであり、また踊りの中へと自己同化していく起点を示す句でもある。」のだという。

実際の原体剣舞は、少年による剣舞であるにもかかわらず、賢治は舞手を若者に変換させたいのである。それはなぜか。中村稔氏も「原体剣舞連」解説で示されるように、賢治は剣舞の舞手たちに自身の「心」にひそむ修羅たちの乱舞をみている^{(*)5}のである。

詩「春と修羅」において、賢治は「おれはひとりの修羅なのだ」と叫ぶ。その思いは、この詩の中で、剣舞の舞手たちへの「気圏の戦士わが朋たちよ」との呼びかけの中に響いているのだ。

詩「原体剣舞連」では、修羅である賢治自身の姿を舞手たちに重ね合わせるためには、少年たちではなく、若者の荒々しいイメージが賢治にとって必要だった。それが、《mental sketch modified》（＝修飾された心象風景）の modify された部分であり、つまり賢治の心象を通して見た時、舞手は少年ではなく若者のイメージであったという修飾が加えられているのである。これは、先に挙げた短歌においてもまた同様であり、若者のイメージ、修羅のイメージが修飾として施されているのが認められるのである。短歌の中で賢治が、若者が踊る剣舞の姿に、さまよえるもの、やるせないものを見、また何を求めて踊るのか、という問いを発するの

は、賢治自身の内部にひそむ修羅性を若者たちの踊る剣舞の中に見たためであろう。それでは一体、短歌からさらに何が modify されて、詩「原体剣舞連」は描かれているのか。この詩のもつ特性、つまり modified が施されているものについて迫る。

〈気圏の戦士〉である剣舞の舞手たちは、片刃の太刀をひらめかしながら何と戦うのか。伊藤眞一郎氏は、『「原体剣舞連」』の論の中で、賢治が舞手を少年でなく、若者に設定したその理由について次のように指摘する。

（実際の原体剣舞の舞手は、）定村忠士氏も現地の見聞記のかたちで念押しに報告しているように、小学校の中・低学年の子どもたちである。ところが、筆者自身もそうなのだが、これまでの多くの読者は、この詩の舞手をもっと年長の逞しさも備わってきた若者として読んできた。詩中の舞手のイメージと現実のそれとはみごとにずれていたわけである。ではこの際この読みのずれは、原体剣舞についての読者の無知として、事実的に即し修正されねばならないのであろうか。答えは否である。（略）そもそも作者は「原体剣舞連」で、実際の剣舞を写そうとしているわけではないからである。ここでは剣舞は、詩内部の読みで示してきた通り、性の誘惑の克服という、近年注目されているこの詩人の「魔」をめぐる問題に恰好の題材として、独自に価値づけられ、新たな土俗芸能として取り上げられてい

るのである。舞手を年少の子どもとして読まないことに何ら支障はない。というより、性に目覚めた若者でなければ、この詩の意義は半減するのである。⁶⁶

伊藤氏の言われるように、賢治が心象内で〈性に目覚めた若者〉による剣舞の姿を思い描いたのは、そこに賢治内部での〈性の誘惑〉という意識が投影されたためであろう。性に目覚めた若者をこの詩に登場させたからこそ、この詩の意義が浮かびあがるのだとの伊藤氏の指摘は大いに頷けよう。

詩の中で登場する若者の姿とは、普段着として菩提樹の皮をはいで作ったみのもと、縄の帯とをまとい、辛く苦しい酪農を営んでいるのである。日々の過酷な労働に勤しむ若者たちが、その内部にひそむ性欲の葛藤を、この剣舞という踊りを通して表現しているのだと、賢治は心象内でイメージし、そうして詩に描きとった。若者たちの性的葛藤の姿を、賢治自身の性的葛藤と同化させ、賢治は〈気圏の戦士わが朋たちよ〉と舞手たちに呼びかけたのである。短歌ですでに舞手たちが若者であることを考えると、修飾がここですでに施されているのであるが、詩「原体剣舞連」は短歌のイメージをさらにこえて、賢治の剣舞のイメージは銀河にまでふくらんでゆくのである。つまり、短歌以上に modify されてゆくのである。

蛇紋山地に篝をかかげ
ひのきの髪をうちゆすり
まるめろの匂のそらに
あたらしい星雲を燃せ

dah-dah-sko-dah-dah

肌膚を腐植と土にけづらせ
筋骨はつめたい炭酸に粗び
月月に日光と風とを焦慮し
敬虔に年を累ねた師父たちよ
こんや銀河と森とのまつり
准平原の天末線に

さらにも強く太鼓を〔鳴〕らし
うす月の雲をどよませ

—中略—

さらになだしく刃を合わせ
霹靂の青火をくだし
四方の夜の鬼神をまねき
樹液もふるふこの夜さひとよ
赤ひたたれを地にひるがへし
電雲と風とをまつれ

dah-dah-dah-dah

先に挙げた佐藤通雅氏の論(すゝ)の中で、氏は「敬虔に年を累ねた師父たち」の特徴について、またさらに原体剣舞のまつりの意義について次のような示唆にとんだ指摘をしている。

次に登場するのは、年を重ねた農民たちだ。「肌膚を腐植と土にけづらせ／筋骨はつめたい炭酸に粗び／月月に日光と風とを焦慮し／敬虔に年を累ねた師父たちよ」とは、北上山地という過酷な土壌にへばりつき、天候の異変に心労を重ねつつ、深いしわをたくわえてきた農民たちをさす。これら老若二者に連帯の呼びかけをした後、「こんや銀河と森とのまつり」と高らかにいう。いうまでもなく銀河は宇宙に属し、森は地上に属する。異様な装束をつけ、奇怪な面をかぶり、激しく踊り狂う剣舞は、限りなく土俗的なものであるが、しかしそのままの姿で宇宙と呼応し、宇宙の根源的生命力をも呼びさましようのだと、賢治によっても意識されている。

佐藤氏の言うように、へ北上山地という過酷な土壌にへばりつき、天候の異変に心労を重ねつつ、深いしわをたくわえてきた農民たちへの働く労働条件の過酷さを、読者は想起せずにはいられないだろう。このような暮らしだからこそ、剣舞というまつりがまたいきてくるのだ。若い舞手と、太鼓をならす師父たちによって繰りひろげられる剣舞を、賢治はへこんや銀河と森とのまつ

り」とよぶ。それは、原体村の村人たちが北上山地での酪農という〈月月〉に日光と風とを焦慮しながらの過酷な労働であり、それだけに日光や風、雲、星の動きには敏感に反応していただろうと推測されうる。〈雹雲と風とをまつれ〉にあるごとく、原体村の村人たちにとってこの剣舞は、自然の恵みに対する、また自然の脅威に対する、村人たち独特の表現行為としてのまつりであるのだ。

恩田逸夫氏は、「賢治における舞踊への関心」という論の中で、蛇紋山地にひろがる篝火の効果について次のように述べる。〈地上の光である篝火は、天上の光である星座と呼応しているし、この詩はかがり火に始まってかがり火に終わっている。火を掲げるのは、いうまでもなく銀河を祭ること、天空を祭ることである。〉のだと。

〈蛇紋山地に篝をかかげ〉〈あたらしい星雲を燃せ〉とは、北上山地の広がる大地に篝火をたいて、その辺り一帯がぼんやり明るくなる光の効果をうんでいる。またさらに、〈准平原の天末線に／さらにも強く太鼓を（鳴）らし〉とは、同じく北上山地の地平線に鳴り響く太鼓の音、ダー、ダー、ダー、ダー、ダスコダーと強くとどろく音の効果もまたあるのであり、そうした篝火の光と音との効果によって、この〈銀河と森とのまつり〉をもりたてているのである。それら効果によってこそ、恩田氏の言う〈銀河を祭ること、天空を祭ること〉は可能なのではないか。

Hoi Hoi Hoi

むかし達谷の悪路王

まつくらくらの二里の洞

わたるは夢と黒夜神

首は刻まれ漬けられ

アンドロメダもかざりにゆすれ

青い仮面このこけおどし

〔太〕刀を浴びてはいつぶかぶ

夜風の底の蜘蛛おどり

胃袋はいてぎつたぎた

dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah

(中略)

夜風とどろきひのきはみだれ

月は射そそぐ銀の矢並

打つも果てるも火花のいのち

太刀の軋りの消えぬひま

dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah

太刀は稲妻萱穂のさやぎ

獅子の〔星〕座に散る火の雨の

消えてあとない天のがはら

打つも果てるもひとつのいのち

北上山地から発する光と音との、このまつりが他の天体の星雲にも届いたかのように、へアンドロメダもかぐりにゆすれ」と、アンドロメダ星雲が、北上山地のかがり火の照り返しによって、赤い光を返してくるのだ。これこそ、へ銀河と森とのまつり」であり、剣舞が宇宙と呼応していることをさすのである。

また、太刀と太刀とがふれ合い、軋り合う音は剣舞の迫力をも思わせるものである。へ打つも果てるも火花のいのちへ打つも果てるもひとつのいのち」とは、あくまでもへ気圏の戦士」としての修羅どおしの戦いを、賢治は思い描いているのであり、打つ方も打たれる方も火花のような、はかない存在であることを示している。剣舞に、修羅対修羅の闘争を見、またその修羅のいのちのはかなさを描く賢治。その時、へ打つも果てるも火花のいのち」としての修羅のはかないのちであるならば、修羅であるこの身を、銀河に向かって解き放ってしまえ、という賢治の切ない思いが、この詩には重ねられているのであらうと思われる。

*

短歌ですでに、少年ではなく、事実とは異なった《若者》を登場させていることを考えると、短歌ですでに modified が施され

ているのが認められる。しかし詩「原体剣舞連」では、その短歌の内容をさらにクローズアップさせたかたちで、このまつりは銀河と森とが呼応したものだとして飛翔させており、また擬音語などの効果によって臨場感をもし出しているのである。それが、この詩「原体剣舞連」における (mental sketch modified) の modified が施されている意味内容の部分である。それでは、韻律の調整によって modified が施されている可能性の方はどうか。安川定男氏は、「賢治の詩の音楽性について」^(*) という論の中で、この詩の韻律の調整について次のように指摘している。

「原体剣舞連」の場合もまた、「dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah」という太鼓の擬音化や「Hoi Hoi Hoi」という呼び声や一、二箇所破調を除いて、全篇(四十数行)が七・七と七・五と五・七の連続もしくは交錯した反復をもって貫かれている。(中略)七・七、七・五、五・七の不規則な連鎖と交替から成る韻律構造の多少の錯雑さにもかかわらず、その力強い躍動性とたたみこむリズムによって、本篇の主題たる「剣舞」に全くふさわしいテンポ、アクセント、抑揚を生み出している(中略)七・七、七・五、五・七の一律でない不規則な交錯を含んだ反響が、そのたたみかけるような急迫したリズムによって、躍動的な舞踊のダイナミズムを見事に写し取っていると言ふべきであらう。

安川氏の指摘する〈七・七、七・五、五・七の不規則な連鎖と交替から成る韻律構造〉とは、まさに賢治が (mental sketch modified) と傍題したところの modified が施されている韻律調整内容の部分である。今回、本稿では詩「原体剣舞連」における (mental sketch modified) の modified が施されているところの意味内容について重点をおき論及してきたが、韻律の調整もまた賢治が modified を施した要所でもあるのだ。

この詩において賢治は、修羅としての心象風景と呼応させるかのように、剣舞の戦う姿を修羅と見ており、このまつりを〈銀河と森とのまつり〉だと飛躍させるその時、賢治内部の修羅は銀河へと昇華されるのではなかっただろうか。

(*1) この第一段落目については、栗原敦「賢治詩事典『春と修羅』第一集」(「別冊國文学」No.9 宮沢賢治必携) 學燈社 一九八〇年五月) に依拠しており、また要約しまとめた。

(*2) この第二段落目については、佐藤通雅「賢治詩の解析・原体剣舞連」(「國文學 解釈と教材研究」學燈社 昭和五十九年一月) に依拠しており、また要約しまとめた。

(*3) この段落に関しては、『宮沢賢治語彙辞典』(東京書籍 一九八九年十月 第一版第一刷) より「剣舞」の項を要約しまとめた。

(*4) 佐藤通雅「賢治詩の解析・原体剣舞連」(「國文學 解釈と教材研究」學燈社 昭和五十九年一月)

(*5) 中村稔「原体剣舞連」解説『日本の詩歌18 宮沢賢治』中公文庫 (中央公論社 一九九一年七月)

(*6) 伊藤眞一郎「原体剣舞連」(「國文學 解釈と鑑賞」至文堂 一九九五年九月)

(*7) (*4) に同じ。

(*8) 恩田逸夫「賢治における舞踊への関心」(「武蔵野女子大学紀要 第2号」武蔵野女子大学文化学会 昭和四十二年三月一日)

(*9) 安川定男「賢治の詩の音楽性について」(「國文學 解釈と鑑賞」至文堂 一九九五年九月)